



今年の夏は、ラニーニャ現象の影響か猛暑でクマゼミが異常発生するやら大変な夏になっていますが、みなさん夏バテなどしていませんか？

今回はオパ着の似合うダンディーな医師、宮本外科部長に感染制御ドクターについてお話を伺いました。

## 特集！感染制御ドクターに聞く！

**医師 宮本 勝文 外科部長**

### 感染制御ドクター(ICD)の資格について！！

宮本先生。こんにちは！今日はお忙しいところ、ありがとうございます。

宮本先生は、播磨病院感染制御委員会の委員長として熱心に院内の感染対策に取り組まれていますね。

Q：早速ですが、この資格はどうして取得しようと思ったのですか？

A：私は消化器外科医ですが、院内感染として3番目に多い手術部位感染の原因として最も多いのは消化器外科手術です。消化器外科手術は術中に消化管吻合（臓器と臓器をつなぐ）を行う際にどうしても一旦、消化管が開放され、腸内細菌の暴露を受けるためです。消化器外科医にとって感染症のmanagementは日常診療上非常に大きなウエイトを占めるのです。そういう点で感染対策にかかわることは自分自身にもメリットの大きなことであると思い取得しようと考えました。

外科手術という感染のリスクがどうしてもぬぐいきれない中で患者さまに安全な医療を提供するのに必要な資格なんですね。

Q：では、この資格について少しお聞きします。  
この資格はどのような内容の資格でしょうか？

A：ICDとはinfection control doctorの略で、病院感染の低減を目的に活動する専門家として認定される資格です。1999年に感染制御に関連の深い6学会合同でICD制度協議会というものが組織され、この協議会がICDを認定・養成しています。少し古いデータですが、2004年までの全国のICDの数は3,498人とされており、全国の一般病床1,178,083床から計算すると298.4床に一人の割合となっています。

播磨病院には私の他、楠本先生と大西先生もICDの資格を持っていますから、60床に一人の割合となっており、全国平均よりはるかにICDの密度が高い状態となっています。

資格の取得はあまり難しいものではありません。学会での発表や講習会への参加などで比較的簡単に資格は取得できます。

Q：受験勉強する上で苦労したり思い出に残った出来事がありますか？

A：資格取得にあたっては講習会への出席や学会発表・論文などの実績が必要となります。

私は2度の講習会参加と1度の学会発表で取得しようと思っていたのですが、その年、新潟で開催する予定であった学会が地震で中止となってしまいました。そこで資格実績を取得するために平日午後から横浜で開催されるその年最後の講習会に参加するため日帰りで横浜まで往復したという思い出があります。

Q：この資格は、更新に必要な手続きはありますか？

A：5年毎の更新で講習会や学会への参加により一定の単位を取得することが必要です。

資格を取得して終わりではなく、新しい知識、技術を身につけていかなければ患者さまの安全が守れないということなんでしょうね。

Q：最後に、今後の抱負を教えてください。

A：職員感染対策の充実を図り、自己の感染の知識や職員指導技能の向上に常に努め、播磨病院職員全体で患者様に、よりよい医療・看護が提供できればと思っています。



いかがでしたか？

近年、全国の病院や施設で院内感染が大きな問題となっています。

先生のようなICDの資格をもたれて全国で活躍されている先生はまだまだすくないようです。

今後、宮本先生を中心として播磨病院感染対策を充実させ、患者様の安全を守っていきたいですね。

宮本先生の今後のご活躍を期待しています！

ありがとうございました。

**さて、次回のTTAK新聞は どんなお話が聞けるでしょうか？・・・**

**お・た・の・し・み・に！！**

TTAK新聞のバックナンバーは  
播磨病院ホームページ <http://www.harima-hp.jp/main.htm> からご覧になれます。

**BY：D. K**

